

姉妹・友好都市交流

Exchanges with Sister and Friendship Cities



姉妹都市

アメリカ テキサス州
ナカドウチエス市
Sister City Nacogdoches

ナカドウチエス市と旧名瀬市は、ステファン・F・オースチン大学と奄美看護福祉専門学校が姉妹校協約を結ぶのを契機に、両市民が教育・文化・経済等幅広い分野の交流を深めるため、平成7年4月26日に姉妹都市協約を締結しました。平成17年4月には、市町村合併後の奄美市においても姉妹都市協約を継続する調印を交わし、現在に至っています。現在、中学生のホームステイ派遣や受け入れなど、教育・文化面での交流が継続して行なわれており、本市の国際化へ大きく貢献しています。

友好都市

Friendship City



〈空港で結ぶ友好都市連携に関する協定〉大阪府 豊中市

Friendship City Toyonaka

空港で結ぶ友好都市連携に関する協定締結



交流事業

Exchange Program

長野県小川村との交流

Ogawa village,
Nagano Prefecture

平成10年から小学6年生を対象に奄美市住用町(旧住用村)と長野県小川村の交流が始まりました。自然や生活環境の異なる地域で体験交流を通して、生活様式・習慣・文化等の違いや良さを見直し、相互のまちの発展を担う青少年を育成することを目指されています。



群馬県みなかみ町との交流

Minakami village,
Gunma Prefecture

群馬県みなかみ町と旧笠利町は、平成13年度から青少年の交流事業を行っています。夏の時期には、みなかみ町の小学生を受け入れ、冬の時期には、笠利町の小学生を派遣して、相互の青少年の育成に貢献しています。



なごや さげんた
名越左源太 (1819~1881)



薩摩藩の上級藩士で武術や和歌、絵、医術などに長けていたが、藩の世継ぎ問題(お由良騒動)で、1850年~1855年まで名瀬に逐島になった。このとき、奄美各地で見聞した奄美の風俗や産業、動植物などを絵入りで描き綴ったのが「南島雜話」で、奄美民俗書のバイブルといわれている。写本5冊は奄美博物館所蔵。

いづみ ほうろう
泉 芳朗 (1905~1959)徳之島出身



奄美群島の日本復帰に尽力した指導者で、復帰の父ともいわれる。戦後、奄美群島は8年間米軍政府統治下におかれながら、祖国復帰を果たすため、泉らは、断食などの非暴力で抵抗。また全群島民の99.8%の署名を集めるなどをした結果、1953年12月25日に、奄美群島の復帰が成就した。奄美市のおかみ山には、断食悲願詩碑と記念碑が建立されている。

まるた なんり
丸田南里 (1851~1886) 奄美出身



黒糖自由販売運動の先駆者。英国商人グラバーとともに渡英し、明治政府になつてから帰國。新政府になつても藩政時代の專売制度を踏襲する大島商社の搾取に憤り、明治8年から全島民によりかけ、大島商社の解体と砂糖自由販売運動を提唱し、11年に実現させた。奄美市名瀬井根町に墓がある。

もとじ しんぐま
泉二新熊 (1876~1947) 奄美出身



日本法曹界の先駆者といわれる裁判官、刑法学者。東京帝国大学卒業後、裁判所検事、司法省などをつとめながら「改正日本刑法論」、「刑法学大要」などを出版。少年犯罪や陪審員姓氏の研究を続け、「少年法」制定に尽力した。検事総長、大審院長、退官後は枢密院顧問官を歴任した。刑法学者としても著名で、その刑法学は「泉二刑法」と呼ばれ、広く世に知られた。

奄美市ゆかりの人々 People connected with Amami City

えばら よしもり
恵原義盛 (1905~1988) 奄美出身



奄美の民俗研究家。ケンムン博士。上京後、貯金局に勤務しながら東京物理学校に学ぶ。台湾で金鉱試掘業に従事とともに、南洋および琉球弧の民俗学を志すようになる。その後、法務省で勉学し、刑務所長として全国を回る。

大島刑務所長として帰郷後、奄美の心と生活の記録を綴、「奄美生活誌」や「奄美のケンムン」など多くの著作を発表した。

たなか いっそん
田中一村 (1908~1977) 栃木県出身



日本画家。幼少のころから天才的な才能を發揮していたが、独学で画境を開き、50歳のとき奄美に移住。奄美的動植物を精密な写生と大胆な構図で描いた。没後、その画業がテレビで放映され、全国で大反響をよび、作品展が全国を巡回、記録的な入場者数となる。奄美パーク内に、田中一村記念美術館が建造され、作品が常設されている。

かざり えいきち
文 英吉 (1890~1957) 奄美出身



ジャーナリスト、民俗研究家。奄美大島日本復帰協議会副議長。幼少のころから読書を好み、奄美郷土芸能に興味をもつ。「南島時報」の編集長となり、「新大島」や雑誌「南島」を創刊するなど執筆活動を展開。また、奄美の芸能研究に取り組み、「奄美民謡大観」を出版。米軍政府下には奄美図書館長などを務め、奄美群島日本復帰にも貢献した。

しまおとしお
島尾敏雄 (1917~1986) 福島県出身



純文学作家。日本芸術院会員。昭和19年、特攻艇第18震洋隊長として、加計呂麻島に赴任、後に妻となるミホと出会い、昭和20年8月13日、出撃命令を受けながら、待機のまま敗戦。これらの経験が彼の文学の原点となった。ミホとともに昭和30年~50年まで名瀬で暮し、県立図書館分館長の傍ら、「死の棘」など数多くの文学作品を書いた。同敷地跡に、文学碑が建立されている。